NEZASU

教育研究所ニュースレター　№12　1994年12月

発行：神奈川県高等学校教育会館・教育研究所　〒220　横浜市西区藤棚町2－197　電話：045－231－2546

ある家庭科教師の生涯

－人生最後の輝きとしての死－

研究協力員　菅　　龍一

家庭科・男女共修のさきがけ

私の母は戦前は高松の女学校、戦後は鳥取市の高校の家庭科教師だった。教師としての母の思い出の中で、もっとも印象に残っているのは、私が小学校4年生のときのことである。戦争が激しくなり、お手伝いさんが戦時徴用にとられていなくなった。母は私を呼んでこう言った。

「今日から、オマエに家事を手伝ってもらいます。お母さんはオマエたちを養うために働いとるのやから、手伝うのは当然ですよ」

その頃、父は禅僧堂で修行中の身だった。母は私に、女学校の生徒にするように、こんな講義までした。

「そもそも食物は大きく分けて三種類ある。含水炭素（デンプンや糖類）、蛋白質、脂肪や。含水炭素とは米やイモやカボチャのことや。これは加熱するとアルファ化され柔らかくなる。だからイモやカボチャは火がとおってから味つけすると、味がしみ込みやすい。蛋白質は生物だけが作り出す物質で、肉や魚や。これは含水炭素とは逆で、加熱すると凝固する。そやから、まず味つけをしといてから煮たり焼いたりする。わかったな。原則はちゃんと教えたんやから、あとはオマエが応用して工夫するんやで」

小学校4年生に含水炭素、蛋白質、加熱、凝固など理解できるのかと、心配される方がいるかも知れない。しかし心配は無用だった。私は理科好きな子どもだったから、こんな高級な言葉を知って、自分が一段と利口になった気分になり、喜び勇んで家事労働をはじめたのだった。母は

弟や妹にも、この年齢になると同じ対応をした。当時は「男子は厨房に入るべからず」という時代である。母の教育方針は、家庭科・男女共修のさきがけをなすものだった。

私も母をまねて、自分の子どもに早くから家事をさせた。小学校の4年生あたりから、子どもは急速に知的・技術的好奇心が旺盛になる。とくに火や刃物には興味を持ち、それが自由に使える家事は楽しい遊びのようなものである。早い年齢で家事をはじめると、それは創造的な楽しい行為であると刷り込みされ、一生いやにならない。

だが高校生や大学生になってから、親が家事を命じると、子どもにとってはいやな仕事を押しつけてきたと感じるのである。そして好きになれない義務としての労働という刷り込みがされてしまう。毎日の家事が苦痛だという主婦に出会うことがあるが、聞いてみると「もうそろそろ一人前に家事ができないと、結婚してから困るから」と親に強制され、それ以来好きになれないという話だった。

家事は教育や労働の原型である。目的がはっきりしている。その目的に沿って設計ができる。設計に合わせて材料を集める。調理の技能の習熟。美的な盛り合わせの工夫と、その結果得られる達成感。そして消費や評価まで自己の中で完結する。教育や労働が本来持っていなければならない全体性を、これほど見事に具現しているものは珍しい。小学生の子どもを持つ皆さんには、ぜひこのことを理解していただき、家庭教育の柱として、早い段階で楽しい刷り込みをして欲しいと思う。

教師としての誇りを否定されて

鳥取市の私立女子高を最後に母は退職した。そして宮津市の妹夫婦と住むようになった。妹たちは共働きの教師だったから、孫の面倒を見るという晩年だった。八十歳近くなった母は肺ガンであること、それもかなり進行した状態であることが判った。宮津市の病院へ入院。主治医によると半年か10カ月の余命だと言う。

妹から知らせを受けた私は、悲しい気持ちの一方で、あと半年間看取りができるという喜びに似た不思議な感情を味わっていた。その十数年前に、私は禅僧であった父を亡くした。父は脳出血で倒れ、意識が戻らぬまま死んだのだった。父の死後、私は後悔した。こんな死にかたをするのだったら、生前に聞いておきたいことが一杯あったからである。それに比べると、母の場合はまだ半年あるのだ。母にその生涯について語ってもらいながら、私らしい看取りをしようと心に決めたのだった。

母と静かに語り合いながら、おだやかな看取りをしていく。そんな私の夢想は、まもなく吹っ飛んでしまった。母の病院は妹の勤める小学校の学区にあった。看護婦さんの中にはＰＴＡの役員もいて、はじめは「先生のお母さんが入院した」というので大切にされ、母も満足していた。

だが1カ月を過ぎたころ、母は医師や看護婦、同室者といろんなトラブルを起こし、妹から涙声の電話がかかってくるようになった。原因は母のわがままだった。医師や看護婦の言うことを聞かない。同室者に命令的にものを頼む。さらに病院の食事にケチをつけ、妹に「こんなまずい食事はたべられん。明日は寿司を買ってこい」などと命ずるのだった。妹の訴えに、私は見舞いに行って母を叱り、行けないときは手紙で母を諌めた。母は頭が良くプライドの高い女性だった。そして生徒に対しても厳しい戦前型の教師だった。家庭科の教師だから調理にもうるさい。そんな性格が裏目に出たのだった。家族の中で母を叱れるのは長男の私だけであり、毎日見舞っている妹の苦境を救うために、私は母を叱るという役割を演ずるしかなかったのである。

あるとき、隣のベッドに女子高生が入院してきた。他の同室者が言うことを聞いてくれないので、40度の高熱で寝ていた女子高生を起こして用事を言いつけた。このことが看護婦の間で問題

になり、「こんなひどい患者は、はじめてや」と言われたという。そのとき同室の年配の患者が母に言った。「あんたは、ほんとうに高校の先生やったんか。信じられんわ。もと先生やったら、他人の気持ちがもう少し分かるはずやろ」

母は自分が優秀な教師であったと信じており、そのことを誇りにしていた。その誇りを同室者に否定されたのである。この夜、母の血圧が急激に下がり危篤状態になった。妹からの電話で、私は病院にかけつけた。私が着いたのは翌日の午後だったが、病院の処置が良く、母は危機を脱していた。しかし、何とも情けない表情だった。そんな母を見て、私はもう母を叱ったり諫めたりするのは止めようと思った。そして、母の否定された誇りを回復させて死なせようと心に誓ったのだった。

わが生涯に悔いなし

母がかつて勤めていた高松市や鳥取市の病院に入院していたら、市内には多くの卒業生がいるのだから、毎日のように教え子たちが見舞いにきてくれたであろう。彼女たちが「先生、先生」と言ってくれれば、母の精神は安定し誇りは保たれただろう。そして同室者から「あんたは、ほんとうに先生やったんか」とは言われなかったにちがいない。

母の悲劇は、高松や鳥取から遠い宮津で入院していることだった。この距離を縮めることはできないだろうか。私は考えに考えた末、地方新聞に投書することを思いついた。高松市と鳥取市の新聞に、母が入院していること、病状は末期だが意識は明晰であること、卒業生に手紙を出して欲しいことを訴える投書をしたのだった。

マスコミの力は偉大である。投書が掲載されると、母のもとへ卒業生からの手紙がつぎつぎ届けられた。母を見舞った私は、それらの手紙を読んで聞かせた。中には母に習ったメニューを今でも得意の料理とし、子どもたちに「これは私の先生に教わったのよ」と伝えているという内容のものもあった。私が「家庭科の先生って幸せだね。教えたことが卒業生の生活の中で生きつづけてるんだから。物理を教えているボクが病気になっても『むかし、先生に教わったニュートンの法則を、今でも生かしています』なんて、だれも言ってくれないよ」と言うと、母はあふれる涙をぬぐいながら、声を立てて笑った。同室の患者さんたちも、手紙の内容や私とのやりとりを聞いている。もう誰も「ほんとうに先生やったんか」とは思わないだろう。母の誇りが回復されたのを私は感じていた。

さらに数週間たったころ、妹から「もう長くはないと主治医が言っている。お別れのつもりできてくれ」と電話があった。このとき、私は三日間の年休をとり出かけていった。母の枕元にはさらに多くの手紙の束、卒業生やかつての同僚たちの寄せ書きの色紙、卒業アルバムを拡大した写真などがふえていた。母は過去の思い出深いシーンに取り囲まれ、人生最後の輝きの中で死を迎えようとしていた。私の顔を見ると、母が言った。

「こんところ、急に教え子から手紙が来るようになったな。オマエがなんかしたんやろ。正直に言え」

私は、一瞬迷ったのだが、この際ほんとうのことを言ったほうが、私の気持ちが伝わるだろうと考え、事実のとおり話をした。すると母は

「そうか。新聞に投書をなあ。オマエらしいアイディアや。感心したわ」

とほめてくれた。この夜、妹の家に泊まり、翌日病院へいくと、母は私の顔をじっと見つめて言った。「ゆうべ、一晩考えたんやけどな。オマエが投書したちゅうことは、わたしはもう助からんと思うたからやろ。正直に答えるんや。嘘をついてもお母さんには通用せんよ」

私は母のこのような問いかけを、ひそかに待っていたのである。病名はともかくとして、母を

最後までだましつづけたくなかった。私は、母にもう回復する可能性はないこと、会いたい人や言い遺すことがあれば言ってほしいと告げた。すると母はとり乱した様子もなく、こうつぶやいた。

「そうやったんか。そうやないかと思うとったわ」

つぎの日は、私も神奈川に帰らなければならない。私がお別れに病院を訪ねると、母が「ゆうべ、また一晩考えたんや。オマエに言い遺したいことがあるわ。わが生涯に悔いなしや」と、私に笑みを浮かべて言ったのである。私には、母の笑みの中にこめられた感情が伝わってきた。(どうや、嬉しいやろ。オマエはお母さんに「わが生涯に悔いなしや」と言わせとうて、新聞に投書し、教え子に手紙を書かせたんやろ。わたしには、ようわかっとるで)

これが母との最後の会話となった。最後まで母らしい毅然とした態度だった。私は今でも昨日のことのように、このときの母の表情を思い出す。そして胸が熱くなるのである。

(すが　りゅういち、和光大学講師・作家)

□著書…『人生最後の輝きとしての死』(看護の科学社)『子どもが心を開くとき』(一ツ橋書房)『子どもの愛し方』(教育史料出版会)

教育研究所だより

教育研究所交流集会に参加して

－7.20～22・越後湯沢－

日教組の国民教育文化総合研究所(略称「教育総研」)主催の全国の組合立教育研究所の第4回交流集会が開催された。1日目は国際教育研究委員会と地域教育改革委員会の最終報告が、2日目は「新学力観」プロジェクトの最終報告と教育研究所設立に向けた新潟、大阪、熊本の取り組みが報告され、3日目は教職員をめぐる人間関係研究委員会と学校制度と現代社会研究委員会の中間報告が行われた。

「新学力観」は、学習指導要領に基づくといいながら、具体的には評価の基準を定めた指導要録からでてきたもので、生涯学習の考え方を学校教育に貫徹しようとするものである。子どもの意欲や関心に沿った多様性がまずあって、基礎・基本は二の次との考え方だ。高校でも「学力」とは何かが問われている。

(三橋正俊)

第7回教育文化フォーラム

「今、子どもたちをどう見つめるか」に参加して

－11.12・松江－

基調講演で銀林浩さん(明治大)は「評価を前提とした教育は意欲の低下を招く」可能性に触れた。次のパネルディスカッションで小沢牧子さん(和光大)は「生活の論理・個別の意欲を大事にしたい」と提起した。島根県の高校入試制度について池原稔さん(安来三中)と木下英樹さん(松江工高)から報告があり、木下さんからは推薦・面接などを肯定する発言があり、黒沢惟昭さん(神奈川大)も格差解消のためには有効と発言。この点については討論の場で批判が出された。

私は「今回のフォーラムのテーマそのものが親や子ども、教員の教育要求から出されたものではない。今めざすべき改革の方向は、入試をなくしていくことではないか」と発言した。司会の鎌倉孝夫さん(埼玉大)、小沢さんから同感の意見が最後にあった。

(石田和夫)